

ちよっと名大史

豊田講堂

本学東山キャンパスのシンボルの一つである豊田講堂（設計者：槇文彦。1962年度日本建築学会賞受賞）は、1960年にトヨタ自動車工業株式会社（当時）から建設寄付を受けた建物です。建物名称については、「発明家豊田佐吉翁を記念する意味で豊田講堂」としたことが記録に残されています。

本学では、名古屋帝国大学創設当時から、講堂と図書館は地元からの建設寄付を仰ぐという方針がありました。しかし、戦時下に創設された十分な施設設備を整える間もなく終戦を迎え、さらに戦後新制大学として再出発した直後も各部局が東山・鶴舞・名城地区など10余の地区に分散したいわゆる「たこ足大学」状態にあった本学では、講堂・図書館の設備は手付かずのままになっていました。東山キャンパスに豊田講堂ができる以前は、鶴舞キャンパス医学部構内にあった附属図書館内の講堂が本学唯一の講堂でした。

しかし本学では、1950年代はじめ頃から全学的な設備計画を策定し、医学部と附属病院を除くほとんどの部局を東山地区に集結させることが決められました。この東山地区移転は、1960年代中頃までにかけて、工学部、経済学部、法学部、文学部、教育学部、本部、教養部、農学部の順で行われました。豊田講堂の完成は、法学部の移転までが完了した時期にあたります。



豊田講堂完成直後の東山キャンパス（1960年）

- | | |
|------------|--------------|
| ①工学部 | ⑦宇宙線望遠鏡研究室 |
| ②理学部 | ⑧図書館予定地 |
| ③原子力研究室予定地 | ⑨経済学部 |
| ④豊田講堂 | ⑩法学部 |
| ⑤本部予定地 | ⑪文学部、教育学部予定地 |
| ⑥クラブハウス予定地 | |



現在の東山キャンパス（2001年）

名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物に関する情報をお持ちでしたら、
大学史資料室（052-789-2046）へご連絡下さい。

本連載第8回（No.115）において、本学東山キャンパスのシンボルの一つである豊田講堂（設計者：横文彦。1962年度日本建築学会賞受賞）が1960年にトヨタ自動車工業株式会社（当時）から建設寄付を受けた建物であることについて触れました。今回は、その完成式典等について紹介します。

豊田（とよだ）講堂は1960年4月に竣工しましたが、その完成記念式典は、同年5月9日に行われました。本資料室の保管資料によると、式典は「開式の辞」「音楽演奏」「式辞」「設立経緯について」「工事経過報告」「寄付目録贈呈」「感謝状贈呈」「総長あいさつならびに感謝状授与」「文部大臣祝辞ならびに感謝状授与」「来賓祝辞」「祝電披露」「万才三唱」「閉式の辞」の順で行われ、式典後には同講堂ロビーで祝賀会が催されました。

写真（左下）は、完成式典の際に、本学とトヨタ自動車工業株の連名で用意された記念品（木製ブックエンド）です。各サイズが横幅16cm×奥行10cm×高さ15.5cmの豊田講堂をデザインとした特製品ですが、その製作者名や製作数量などは明らかではありません。なお、同講堂の完成記念品としては、このブックエンドのほかに名大生協が作成した「豊田講堂完成・第1回名大祭 記念絵葉書」（4枚組み）があります。



豊田講堂完成式典



音楽演奏



ブックエンド



生協作成の記念絵葉書

名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物等に関する情報をお持ちでしたら、
大学史資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡下さい。

40 青色発光ダイオードと豊田講堂時計台

現在、本学東山キャンパスのランドマークである豊田講堂は、夜間のライトアップが行われ、時計台にも鮮やかな青色のイルミネーションが施されています（写真1）。今回は、その時計台のイルミネーションについて紹介します。

本連載第8回（No.115）で取り上げたように、豊田講堂は1960（昭和35）年に完成しました。当時、豊田講堂時計台（直流式塔時計・文字盤直径2m）はライトアップやイルミネーションなども全く施されておらず、昼間しか時計をみることはできませんでした（写真2）。

では、時計台にイルミネーションが施されるようになったのはいつ頃であるかという、それは1994（平成6）年度のことです。ただし、その当時のイルミネーションは、文字盤および時計針・分針に赤色の発光ダイオード（LED）が組み込まれたものでした（写真3）。その後、現在のような青色LEDへと変更されたのは2001年11月のことで、豊田合成株式会社からの寄付によるものでした。

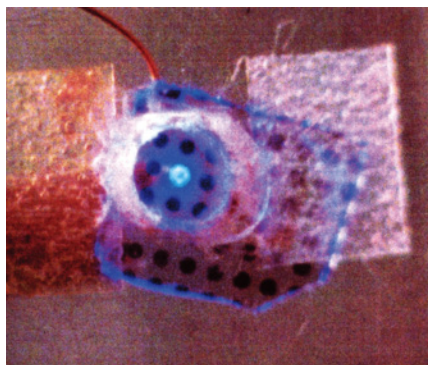
特筆すべきは、現在の時計台に組み込まれている青色LEDは、本学の赤崎勇特別教授が工学部に在職中の1989年に発明・開発したもので、豊田合成株によって実用化されたものです。豊田講堂ロビー西側入口手前の壁面には、「豊田講堂時計台に用いられている青色発光ダイオードは、本学 赤崎 勇 名誉教授が工学部在職中に開発されたものであり、豊田合成株式会社の寄付により完成したものである。」と記された記念プレートが設置されています。

なお、当時不可能とされていた「青」色発光の半導体開発を世界に先駆けて実現した研究業績は半導体研究に革命をもたらしたともいわれ、赤崎特別教授は2004年度の文化功労者として顕彰されています。また、本学では、2000年度から本学に還元されるようになった青色LEDの国有特許実施料を活用して、赤崎記念研究事業（特定研究推進、研究奨励、産学連携推進の3事業）を行っています。



1	2	3
	4	5

- 1 青色LEDが輝く豊田講堂時計台
- 2 完成当初の時計台
- 3 赤色LED当時の時計台
- 4 世界初のGaN-p-n接合型青色LED（1989年）発光させている1つのLEDの光がウェハー内を透過し、周縁で反射している。（名大トピックス No.138より転載）
- 5 赤崎記念研究館模型



42 豊田講堂と勝沼胸像

名古屋大学東山キャンパスにある豊田（とよだ）講堂の南側ロビー内には、1体のブロンズ胸像があります（写真1）。これは、日本芸術院会員の清水多嘉示（たかし）製作による本学第3代総長・勝沼精蔵（1886-1963）の胸像で、本学医学部第一内科同窓会から寄贈されたものです。

豊田講堂が1960（昭和35）年にトヨタ自動車工業株式会社（現・トヨタ自動車株式会社）から建設寄付をうけたものであることについては本連載ですでに触れましたが、その建設寄付をトヨタ自動車工業に持ちかけたのが勝沼精蔵第3代総長でした。

本学では、1950年代後半以降、東山キャンパスの整備が進むにつれて、戦前の名古屋帝国大学時代からの念願であった図書館と大学講堂の建設寄付の実現が課題となっていました。しかし、図書館と講堂の同時建設が困難な状況のなかで講堂優先の方針が定まったことをうけて、勝沼はトヨタ自動車工業の石田退三社長に対して、同社の創設者であり、発明王といわれた豊田佐吉の記念事業として1億

円規模の講堂の建設寄付を打診しています。これをうけた石田社長は、1958年11月に「折角寄付するのだから恥ずかしくないものを」と2億円規模の建設寄付に応じたのでした。

勝沼の要請にこたえる形で始まった豊田講堂の建設は、1959年3月に着工し、翌年5月には竣工しました。しかし勝沼自身は、1959年3月末に任期満了にともなって総長職を退いていました。その後、勝沼は1963年に他界し、豊田講堂で告別追悼式が挙行されました。

1965年11月、医学部から勝沼胸像完成の報告をうけて、11月3日に豊田講堂で除幕式を行うことが学部長会で認められました。除幕式には、勝沼家遺族や篠原卯吉第5代学長など関係者約200名が参列しました。

勝沼胸像の設置場所は、除幕式から約10日後の評議会を経て豊田講堂ロビーとすることが認められました。

なお、勝沼精蔵の胸像は、豊田講堂のほかにも医学部図書館内にも設置されています。



1 | 3
2 |

- 1 豊田講堂ロビー内の勝沼胸像
- 2 勝沼精蔵ブロンズ胸像
- 3 胸像台の銘版

56 豊田講堂地階倉庫

本学のシンボルの一つでもある豊田講堂については、本連載で何度か取り上げました。今回は、少し角度をかえて豊田講堂の地階倉庫について取り上げます。

一般の人々にはあまり知られていませんが、豊田講堂のロビーやピロティの下（地階）には、総面積約500㎡の倉庫エリアがあります（写真1、2）。本連載36号で紹介した「田村模型」は、2005（平成17）年2月にこの地階倉庫内で発見されたものです（写真3）。

ところで、1960年に竣工した豊田講堂は、2006年12月から約1年の工期予定で、大規模な改修工事を受けていることになっています。これに先立って、今年の夏から秋にかけて豊田講堂内の備品等の整理・搬出作業が断続的に行われました。その際、大学文書資料室では、「田村模型」の事例もあるため、特に地階倉庫内で人目につかず長年保存されている大学史関連の資料が存在するのではないかと半ば期待を寄せていました。

事務局職員の手で進められた整理作業では多くの備品類とともに古い事務文書や印刷物在庫などの存在が確認され、それらのうち記録史料としての価値が認められるものについては大学文書資料室で保管することになりました。

写真4の豊田講堂の油彩画は、この整理作業で存在が確認されたものです。この油彩画は、木製の額に入れていますが、作者ならびに制作時期は不明です。豊田講堂の手前（西）側に描かれているバス停周辺の景色から判断して、竣工数年後の様子を描いたものだと思います。

竣工後46年を経た豊田講堂は、時の流れとともにその地階倉庫部分がタイムカプセルのような役割を果たしたともいえるのではないのでしょうか。今回の改修後、現在の地階倉庫部分のうち約2/3の部分が控室として整備される予定ですが、残る倉庫部分にまた新たなタイムカプセルが生まれることがあるのかもしれませんが。



1	2
3	4

- 1、2 豊田講堂の地階倉庫入口
および倉庫内の通路
- 3 発見された当時の「田村模型」
- 4 豊田講堂画（油彩、F15号）

71 榎文彦氏と豊田講堂 —50年の時をこえて—

2008年2月2日(土)、豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイが大盛況のうちにおこなわれ、その主賓の中に、50年前に豊田講堂を設計し、今回の改修の設計も担当した榎文彦氏(1928年～)の姿がありました。

榎氏は、1952(昭和27)年に東京大学工学部を卒業後、アメリカへ留学してハーバード大学大学院などで学び、ワシントン大学助教授となりました。そして58年、グラハム財団の会員として2年間にわたる建築視察のための世界旅行に出発しますが、豊田講堂を建設することになった竹中工務店の竹中藤右衛門社長が榎氏にその設計を依頼したのでした。竹中社長は榎氏の母方の祖父にあたります。

榎氏が世界旅行中に設計した豊田講堂は、そのデビュー作であると同時に、62年の日本建築学会賞を受賞するなど、日本を代表する建築家榎文彦の出世作ともなりました。今回の改修において、内部施設の充実や耐震補強がなされた一方で、その外観の意匠は維持・復元されたのも、

豊田講堂が日本の代表的な近代建築の一つとして広く認知されているからにはほかなりません。

その特徴は、同じ時期に榎氏の設計により建てられたワシントン大学スタインバーグホール、千葉大学医学部記念講堂と共通する左右非対称の空間構成、日本の建築界の殻を打ち破り、当時の世界の潮流を積極的に取り入れたコンクリート打放し工法、東山キャンパスの地形を十分に生かした造園、など数多くありますが、80m×36mの大きな屋根を細い柱で支え、広い架構を確保した構造がとりわけ印象的です。

かねてより榎氏は、豊田講堂を門としての建物と位置づけており、今回の改修竣工式での挨拶でも、正面から見た豊田講堂を門の略字「門」になぞらえたとの話を聴くことができました。豊田講堂は、明確な正門を持たない名大の象徴化された門であるともいえるわけです。



1	2	3
4		

- 1 豊田講堂竣工式(1960年5月9日)に列席する榎氏(右端)。当時31歳であった。
- 2 豊田講堂改修竣工式であいさつする榎氏。
- 3 柱や壁などの杉板本実型枠を使用したコンクリート打放し。表面に木製型枠の木肌がうかび、近代建築の独特なスケール観と型枠職人の手の跡を感じさせる。
- 4 豊田講堂遠景。榎氏によれば、ホールの天蓋が門の略字の点にあたるという。

74 豊田佐吉翁肖像画

2008(平成20)年2月2日(土)、1960(昭和35)年の竣工以来、およそ半世紀にわたって本学のシンボルとして親しまれてきた豊田講堂が約1年におよぶ大規模な改修・増築工事を受け、その竣工を記念する豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイが開催されたことが本誌NO.178に取り上げられています。

例年、大学文書資料室は、ホームカミングデイにおいて本学の歴史に関する企画展示を開催していますが、この竣工記念ホームカミングデイでは「豊田講堂のあゆみ」展を開催しました。この展示は、改修工事を2ヶ月後に控えた2006(平成18)年9月に開催された第2回ホームカミングデイで行われた企画展示を再現したのですが、今回はこれまで未公開であった豊田佐吉翁肖像画(写真1)を展示しました。

この佐吉翁肖像画は、キャンパス裏面などの記録から、1959(昭和34)年5月に株式会社豊田自動織機製作所(現株

式会社豊田自動織機)から本学に寄贈されたものであり、作者のイニシャルがJ.H.であることがわかっていますが、寄贈された経緯などの詳細は明らかではありません。1959(昭和34)年3月下旬、トヨタ自動車工業株式会社から建設寄付される講堂の名称を「豊田講堂」とすることが確定し、それをうけて制作された肖像画が着工直後の5月に寄贈されたものと思われます。

本学に寄贈されて約60年を経た肖像画は、絵の具の状態も良好であり、全体的なクリーニングを行った上で新調した額に収めて展示公開されました。竣工記念ホームカミングデイ当日には、本学の全学同窓会会長である豊田章一郎トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長も佐吉翁肖像画を見学されました(写真2)。

今後、この豊田佐吉翁肖像画は豊田講堂内のしかるべき場所に掲げられることになっています。



- | | | |
|---|---|--------------------------------|
| 1 | 2 | 1 新しく額装された豊田佐吉翁肖像画(油彩、F15号) |
| | 3 | 2 ホームカミングデイで佐吉翁肖像画を見学する豊田章一郎会長 |
| | | 3 クリーニング作業前の肖像画 |

113

とよだ 豊田講堂の有形文化財登録と BELCA 賞受賞

1960(昭和35)年にトヨタ自動車工業株式会社(現在のトヨタ自動車株式会社)によって建設寄附された豊田講堂は、日本建築学会賞受賞(1962年)、「都市景観重要建築物」(名古屋市)指定(1993年)、「DOCOMOMO in Japan 近代建築100」選出(2003年)と、建築物としての意匠やそれが生み出す景観が高く評価されてきました。

そして今年、豊田講堂の価値があらためて認められることになりました。

2月には、第20回 BELCA 賞(ベストリフォーム部門)を受賞しました。BELCA 賞は、公益社団法人ロングライフビル推進協会(略称 BELCA)が創設した、我が国初の既存建築物の総合的表彰制度です。選考講評では、歴史的文化的価値の高いモダニズム建築である豊田講堂に対し、外観を保全しつつ改修・増築を実施し、「建物を使い続けるという大学の明確な意思とそれに応えた技術側の努力が建築の活性化、長寿命化を実現した優れた範例である。」

と評価されています。

そして7月、「名古屋大学豊田講堂」が国の登録有形文化財となりました。この登録は、文化財保護法にもとづき、所有者の希望を受けた文化庁が有識者からなる文化審議会に諮問し、その答申をへて決定されるものです。名古屋大学としては、鶴舞キャンパスにある愛知県立医学専門学校(医学部の前身)および愛知病院(医学部附属病院の前身)の門と外堀あわせて3件(2007年)以来の登録です。

名古屋大学は、医学部の前身学校の創立(創基)から数えると140年の歴史を持っていますが、名古屋帝国大学として創立されてからは72年です。さらに創立期が戦時期から敗戦直後に重なっていたこともあって、現在のキャンパスには古い歴史的な建物がほとんど存在しません。それだけに、しかもこの創基140周年の年に豊田講堂があらためて評価されたことは、きわめて大きな意義を持っているといえるでしょう。



1	2	3
4	5	

- 1 国の登録有形文化財の登録プレート。まもなく豊田講堂に上掲される予定。
- 2 国の登録有形文化財の登録証。
- 3 5月17日にロイヤルパークホテル(東京/日本橋)で举行された第20回 BELCA 賞表彰式において、本学を代表して表彰を受ける藤井理事。
- 4 2007年度竣工のトヨタ自動車株式会社およびトヨタグループ各社の寄附による全面改修・増築後の豊田講堂。その外観は建設当時のままに保存された。
- 5 全面改修で増築されたホワイエ(アトリウム)。これにより豊田講堂と名古屋大学シンポジオンを一体化し、それぞれの機能の活性化をはかっている。

137 豊田講堂完成式 — 名大統一のシンボル誕生 —

1960(昭和35)年5月9日、トヨタ自動車工業株式会社(現在のトヨタ自動車株式会社)の建設寄附による豊田講堂の完成式典が盛大に挙行されました。大学文書資料室には、この式典に関する文書ファイルが保存され、その詳細を知ることができます。

式典の具体的な準備がはじまったのは、躯体工事が1960年3月に終わった翌4月に入ってからでした。トヨタ側が原案を作成し、それを名古屋大学側と協議しながら進められていったようです。式典の運營業務も、トヨタは取締役の1人、名大は事務局長が責任者となり、それぞれ約50名ずつの職員が動員されました。予算は、諸経費を含めて267万2千円とされています。名大の学部生の授業料が年額9千円の時代です。また、4月25日と30日の2回にわたって式典のリハーサルがおこなわれました。

そして、正式名称「名古屋大学豊田講堂完成式」は、ト

ヨタ及び名大の関係者、文部省及び大学関係者、県内から選出された国会議員、県内の官公署関係者や自治体の行政関係者、名古屋財界関係者、報道関係者などの招待者335名の出席の下、午前10時開始、午前11時20分終了を予定として挙行されました。

式辞においてトヨタの石田退三社長は、豊田佐吉や豊田喜一郎ら豊田家の先覚者たちの精神が込められた豊田講堂が、教育の振興、科学の発展の一助となることを切望してやまない、と語りました。また、名大の松坂佐一総長は、大学のシンボルともいべき講堂の完成によって、真に名古屋大学に中心ができたようだ、とあいさつしました。

そしてこの翌月、6月3日から6日にかけて、これからの名大の中心となるべき豊田講堂を主会場として、キャンパスが各地に分散する各学部の文化祭と体育祭を統一した、第1回名大祭が開催されたのでした。



3	2	5
1	4	

- 1 完成式当日の豊田講堂 (名古屋タイムズアーカイブス委員会提供)。
- 2 完成式全景 (中日新聞社提供)。竣工日はこの5月9日とされたが、すでにそれに先立ち、3月には卒業式、4月には入学式がここでおこなわれていた。
- 3 舞台上は、向かって左から名古屋商工会議所会頭、名古屋市長、愛知県知事、文部大臣代理者、勝沼精蔵前総長(檀上)、石田社長、松坂総長、須川義弘建設委員、竹中工務店社長、榎文彦氏(設計者)が上がった。



- 4 完成式終了後の立食パーティーで談笑する勝沼前総長。建設の決定や着工は勝沼総長時代のことであった。
- 5 完成式の際に、記念品として出席者等に贈呈された、豊田講堂をデザインした木彫りのブックエンド(大学文書資料室所蔵)。トヨタ側が準備を担当し、松坂屋に800個を発注した。

160 福山すすむ作「田園」と豊田講堂

今年の6月16日から7月5日にかけて、愛知県安城市の安城市民ギャラリーにおいて、コレクション展「生誕百年

福山すすむ－教育に支えられた自立の芸術－が開催されました。その目玉となった展示絵画の1つが、名大が所蔵する福山すすむ作「田園」です。この「田園」は、かつて豊田講堂の壁面に掲げられていたものでした。

形象派の創始者として知られる福山すすむは、1915(大正4)年に新潟県に生まれますが、まもなく台湾に渡り、そこで育ちました。やがて17歳で台湾の公学校(台湾の人々のための小学校)の教師になります。その後、絵画を本格的に学ぶようになり、独自の画法を発見し画風を確立していきました。流派の名称となった「形象」の概念は、台湾の子供たちへの教育実践の中から生まれ、それを絵画に応用したものです。

敗戦後の1946(昭和21)年、福山は日本に帰国、安城市に居をかまえ、ここを拠点に画家としての活動を始めまし

た。1952年には形象派美術協会を創設、中央の画壇とは一線を画し、地域に根ざした活動を展開しました。美術教育にも熱心にとりくみ、安城を中心とする地域の美術文化の発展に広く貢献しました。30年近くを過ごした台湾との交流も、そのライフワークでした。

その福山が、1961年に名大へ寄贈したとされるのがこの「田園」です。その経緯を明らかにする記録は見つかりませんが、関係者の話によると、農学部の宗像 桂教授から福山に豊田講堂(1960年竣工)の壁画の制作依頼があり、これをうけて制作寄贈されたものであるとのこと。当時の農学部は安城市にあり、絵画に興味を持った何人かの教員が福山のアトリエで趣味の時間を過ごしていましたが、宗像教授もその1人だったそうです。

その後の「田園」についても、豊田講堂の壁面を飾っていた場所や期間を含めて、あまりよく分かっていません。何かご存じでしたら、ぜひ情報をお寄せください。



1	3	5
2	4	

- 1 コレクション展で展示された「田園」(左、135cm×258cm、油彩・パネル)。パンフレットの解説は、「線や色彩の表現から音楽が湧き出るような解き放たれた自由さを感じる」と評している。現在は、名大内の倉庫で保管されている。
- 2 「田園」が表紙を飾ったコレクション展のパンフレット。96点の福山作品が展示された(主催=安城市民ギャラリー、協力=形象派美術協会)。
- 3 「田園」を描く福山すすむ。場所は豊田講堂だと思われるが、「田園」は福山が1961年に名大に寄贈したとされる一方で、絵の裏側には「田園 一九六〇 福山すすむ」とのメモ書きがある。写真は豊講で仕上げをしたものか。
- 4 福山すすむ(1915-1987)。安城文化賞(1963年)、愛知県教育表彰文化賞(1976年)、愛知県芸術選奨文化賞(1981年)などを受賞した。大学院創薬科学研究科の福山透特任教授(東京大学名誉教授)は福山すすむの長男で、農学部の卒業生でもある。
- 5 安城時代の名大農学部(現在の安城市総合運動公園付近)。1966年に東山キャンパスへ移転した。